炭やきと猿のはなし

むかしむかし、山の中に炭焼きの若い夫婦が住んでいたんだどぉ。そうして炭を焼いて米やみそなどと交換して貧乏ぐらしをしていたんばどぉ。その夫婦に赤ん坊が生れて、うぶ湯を使うことになり、炭がまから少しくだった堀立て小屋の外で湯をわかし、赤ん坊にお湯を使ったんだどぉ。ところが山奥に猿が住んでいて、このうぶ湯を使うありさまを不思議そうに見ていたんだどぉ。若い炭焼き夫婦は赤ん坊をひとり堀立て小屋に寝かせておいて、また炭がまのあるところで炭焼きをしていた。ふと見ると自分の家の方から煙が出ているのが見える。囲炉裏の火はよくうずめてきたのにと不審に思って帰ってみると、猿どもが四、五匹火をたいてかまに赤ん坊を入れ、うぶ湯を使っているではないか。びっくりしてかけよってみると、その湯が熱湯で、赤ん坊はとうとう熱湯でやけどをして死んでいたんだどぉ。猿まねという通り、猿は人のまねごとをするのかと若い夫婦は思いながら、子どもをなくした悲しみにしづんだんだどぉ。